

## スキンシップ許容度とコミュニケーション距離：日 本人大学生の分析結果を中心に

曹, 美庚  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/9456>

---

出版情報：言語文化論究. 23, pp. 43-61, 2008-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン：  
権利関係：

# スキンシップ許容度とコミュニケーション距離

——日本人大学生の分析結果を中心に——

曹 美 庚

九州大学大学院言語文化研究院 言語文化論究 No.23 平成20年2月発行 抜刷

Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University  
Studies in Languages and Cultures, No.23, February 2008

# スキンシップ許容度とコミュニケーション距離

—日本人大学生の分析結果を中心に—

曹 美 庚

## 1 研究の背景と目的

情報化の進展と交通手段の発達により、グローバル化が急速に進んでいる。多様な文化を持つ人々の往来が頻繁に行われ、世界的に多文化の共存度が高まりつつある。とりわけ、日本からは韓国と中国は出勤圏内に入ってきており、ランチや買い物などが可能な一日生活圏の中に組み入れられ、いわゆる文化共存共生圏が出来上がっている。しかしながら、互いの文化に対する認識や理解は未だ不十分で、多様なコミュニケーション・トラブルが生じているのも事実である。

ある文化において親密感の感じられる行動や、好意を持ってコミュニケーションを円滑に図るために行われた行為が、他の文化のもとでは脅威や嫌悪感をもたらしたり、タブーに該当するものであったりして、コミュニケーション現場では異文化間トラブルがしばしば生じている。例えば、韓国人は好意を持って親密感を表現するために、同性間であっても腕を組んだり、手を握ったり、ハグ (hug) をする等、多様なスキンシップの表現を好む。さらに、言葉の通じない外国人とのコミュニケーションとなると、自分の好意をスキンシップで表現しようとするため、相手の手や体に触ったり、抱きかかえたりすることも珍しくない。しかし、日本人はそのような状況を体験すると、「もしや同性愛者？」又は「要注意の変人？」と思ったり、戸惑いを感じる。ときには、嫌悪感や恐怖感さえも覚える場合があり、結果的に互いのコミュニケーションは決裂してしまう。また、韓国人にとって日常的に許容されるスキンシップによるコミュニケーション表現が、日本人にとっては理解しがたいものであったり、日本では気楽に感じられる程度のコミュニケーション距離が韓国人にとっては冷たく感じられ、コミュニケーションの持続が困難になる場合がしばしばある。

本稿では、コミュニケーション方法の在り方が異文化コミュニケーション持続の成否に大いに影響を及ぼすと考え、個人のコミュニケーション距離と深い関わりを持つスキンシップの程度や許容度について考察する。これらの考察は、韓国との比較分析及び他アジア文化圏との比較分析、さらにはアメリカやヨーロッパ文化圏との比較分析などをも視野に入れている。すなわち、同一の広域文化圏 (例えば、アジア文化圏) に含まれる類似した2つの文化の間でさえも、「コミュニケーション距離」においては明らかに相違が見られることを実際のデータに基づいて検証しようとするのである。その流れの一部として、本稿では、日本の大学生の同性同士のスキンシップに関する許容度を分析し、日本人のコミュニケーション距離の実態を把握することを目的とする。

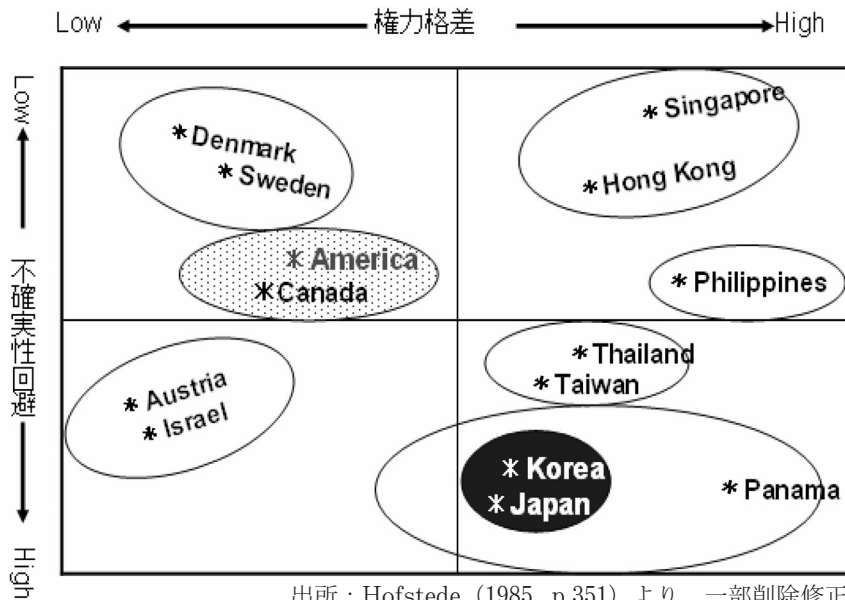
## 2 これまでの研究

従来、日本で行われた異文化理解のための研究では、アメリカ文化と日本文化の対比がしばしば取り上げられた。なかでも「デジタル文化とアナログ文化の対比」や「低コンテクスト文化と高コンテクスト文化の対比」が代表的である。また、E. T. Hall (1976)、*Beyond Culture* やG.

Hofstede (1991)、*Cultures and Organizations: Software of the Mind*、あるいは林吉郎 (1994)『異文化インターフェイス経営』などにおいては、コンテキストや権力格差、個人主義といった文化次元における日米間の違いが示された。一方、曹 (2001)「日本人と韓国人の異文化コミュニケーション」『人間環境学入門』では、異文化コミュニケーションにおけるコミュニケーション距離と関連し、「ゼロ・ディスタンス論」が提唱された。そこでは、コミュニケーション距離を縮めようとする韓国人とそれを一定に保とうとする日本人のコミュニケーション様式についての対比が行われている。

以下、曹 (2001) に基づいて、異文化理解に関連する研究を概観する。世界50カ国を対象に行われた G. Hofstede (1985) の調査研究では、ある社会の構成員が、自分の属する社会における人々との間の不平等な階位的力関係を受け入れる程度を表す「権力格差」の次元において、日本と韓国はアメリカとは正反対のセルに位置し、明らかに異なる文化圏であることが示された。すなわち、日本と韓国は同一セルに位置し、「権力格差」が大きく、「不確実性回避」の程度が高く表れ、社会における人々間の不平等な力関係が社会の構成員によって受容される程度が高く、未知の状況や不測の事態を回避しようとする傾向が強いと解釈できる。明らかに日本と韓国は同一文化圏であるといえよう。

図表 1 2つの社会・文化次元と各国の分布 (1)

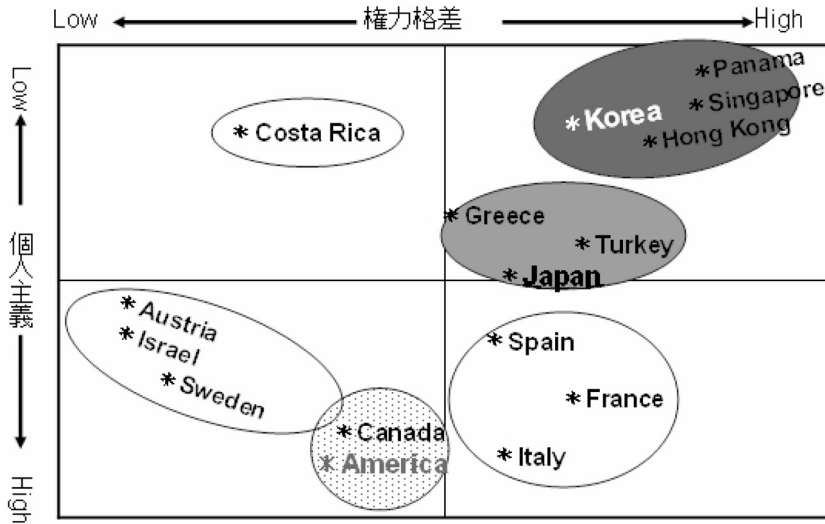


出所：Hofstede (1985, p.351) より、一部削除修正  
(曹 [2001] からの再引用)

さらに、「個人主義」の次元においても、韓国は個人主義の程度が低い集団主義的文化に分類されており、日本も、個人主義スコアが若干高いものの、集団主義的文化圏に含まれている。アメリカが「個人主義」文化圏であるのに対し、韓国と日本は同じく集団主義的文化に属しているといえよう。「個人主義」と「権力格差」の次元においても、日本と韓国は異文化圏というよりは同一文化圏に属しているといえる。一方、曹 (2001) では、同一文化圏内における両文化の異質性につい

て、コミュニケーションにおける「ゼロ・ディスタンス (zero distance) 論」を用いた解釈を試みている。

図表2 2つの社会・文化次元と各国の分布 (2)



出所：Hofstede (1983, p.82) より、一部削除修正  
(曹 [2001] からの再引用)

本研究では、曹 (2001) の「ゼロ・ディスタンス論」を検証すべく、日本人大学生を対象とした質問票調査を行っている。ゼロ・ディスタンス論では、「コミュニケーション距離」がキー概念となっており、本研究を含む一連の研究においてゼロ・ディスタンス論の仮説が検証されれば、コミュニケーション距離の概念を異文化コミュニケーション理論の中で体系化することも可能であると考えている。

コミュニケーション距離とは、コミュニケーションの場面でコミュニケーション当事者の間に保たれる物理的・心理的空間の大きさとして定義される。この抽象的な概念を測定するための操作化変数として、本研究では、「スキンシップ許容度」を用いている。すなわち、歩きながら話をしたり近くに座って話をするとき、手をつないだり、腕を組んだり、肩を組むなどのスキンシップがどの程度まで許容されるかを測定することでコミュニケーション距離を推測できると考えている。具体的には、スキンシップに対する許容度が高いほど、コミュニケーション距離は短いと推測するのである。スキンシップ許容度を測定するに当たっては、新密度合いによって、親密感の高いグループと親密感の薄いグループを区分している。前者には、「親」「兄弟・姉妹」「親友」「親しい先輩・後輩」が含まれ、後者には、「普通の友人」「普通の先輩・後輩」「知り合い程度の人」が含まれる。また、分析方法としては、親密度合いによる分析をベースにしながら、性別による許容度の相違をも考察した。さらに、スキンシップ許容度が高い文化の友人に露出されているか否かによる分析も行った。この調査の目的は、コミュニケーションの際のスキンシップに対する日本人大学生の許容度を理解し、スキンシップの許容度の高い他文化との交流の際にコミュニケーションが決裂せず持続できる方法を模索する根拠となる実証データを収集、分析することである。

### 3 質問票調査の概要と分析

#### 3.1 質問票調査の概要

本調査は、九州大学の大学生を対象に2007年6月初旬から7月下旬までの間に行われた。323部を配布し、320部を回収したので、回収率は99.1%である。そのうち、回答の記録がないなどの欠損が3部あり、317部が有効であった。回答者の男女比率は、男子大学生が179名（56.5%）で、女子大学生が137名（43.2%）を占め、性別不明の回答が1名あった（図表3）。

図表3 回答者の男女比率

	男子大学生	女子大学生	合計
有効回答数	179	137	316
比率	56.5%	43.2%	99.7%

\*性別不明の回答数：1（0.3%）

同性同士のコミュニケーションにおいて、スキンシップ許容度が高いと考えられる他の文化に露出されているか否かがスキンシップ許容度に影響を及ぼすであろうと考え、韓国・北朝鮮・中国朝鮮族系統の友人がいるかどうかを聞いたが、図表4はその結果を示している。この質問に対し、そのような友人がいると答えた人は102名（32.2%）で、そのような友人がいないと答えた回答は215名（67.8%）であった。

図表4 韓国・北朝鮮・中国朝鮮族の友人に露出されているか

	友人がいる	友人がいない	合計
有効回答数	102	215	317
比率	32.2%	67.8%	100%

上記の結果を念頭に置きながら、以下では、「手をつなぐ行為」、「腕を組む行為」、「肩を組むか、肩や腰に軽く手を乗せる（以下、肩を組む）行為」に対する許容度について詳しく分析することにしてしよう。

#### 3.2 同性同士で手をつなぐ行為に対する許容度

歩きながら話をしたり、近くに座って話をするとき、「手をつなぐ行為」に対する許容度を調査した結果、以下の図表5のような結果が得られた。

図表5 「同性の人と手をつなぐ行為」に対する許容度

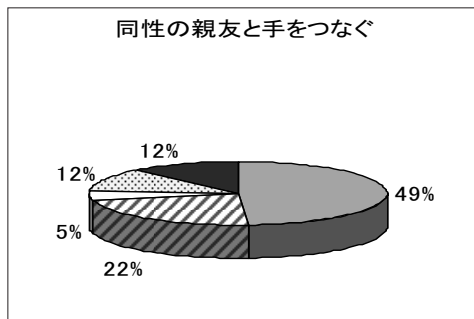
	まったく 不自然	やや 不自然	どちらとも いえない	やや 自然	まったく 自然	合計
親との場合	162 (51.1)	77 (24.3)	13 (4.1)	41 (12.9)	24 (7.6)	317 (100)
兄弟・姉妹	149 (47.0)	69 (21.8)	26 (8.2)	47 (14.8)	26 (8.2)	317 (100)
親友の場合	155 (48.9)	70 (22.1)	17 (5.4)	37 (11.7)	38 (12.0)	317 (100)
親しい先輩・後輩	166 (52.4)	74 (23.3)	18 (5.7)	42 (13.2)	17 (5.4)	317 (100)
普通の友人	191 (60.3)	75 (23.7)	17 (5.4)	27 (8.5)	7 (2.2)	317 (100)
普通の先輩・後輩	204 (64.4)	76 (24.0)	17 (5.4)	17 (5.4)	3 (0.9)	317 (100)
知り合い程度の人	266 (83.9)	39 (12.3)	7 (2.2)	3 (0.9)	2 (0.6)	317 (100)

注) 表中の数字は人数を表しており、( ) 内の数字は%を示している。以下、同じ。

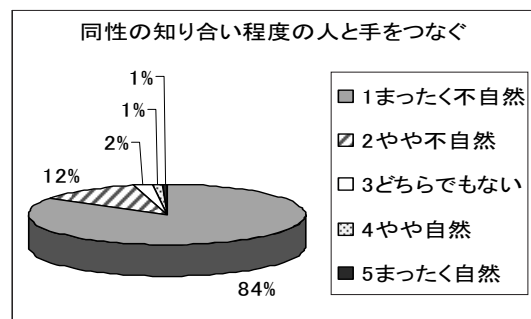
同性間で手をつなぐ行為に対しては、「親、兄弟・姉妹、親友」などの親密感の高いグループと、「普通の友人、普通の先輩・後輩、知り合い程度の人」などの親密感の薄いグループのいずれにおいても、「不自然に思う」と回答した比率が非常に高く、「自然に思う」と回答した比率は低かった。全体的に、日本の大学生にとって「同性同士で手をつなぐ行為」は一般的に好ましくなく、許容されにくいものと思われる。

図表6と図表7にみるように、「不自然に思う」(「まったく不自然」と「やや不自然」を含む。以下、同じ)と回答した比率が一番高かったのは、親密感の薄いグループの「知り合い程度の人と手をつなぐ」場合の96.2%(305名)で、親密感の高いグループの「親友と手をつなぐ」ことに対しても「不自然に思う」と回答したのが71%(225名)であり、親密感の高いグループと親密感の薄いグループの間には約25%強の差があった。「自然に思う」(「まったく自然」と「やや自然」を含む。以下、同じ)と回答した比率についても、親密感の薄いグループの「知り合い程度の人と手をつなぐ」ことに対しては1.5%(5名)で、親密感の高いグループの「親友と手をつなぐ」ことに対しては23.7%(75名)であり、約20%強の差がみられた。

図表6 同性の親友と手をつなぐ



図表7 同性の知り合い程度の人と手をつなぐ



注) 円グラフ上の%数字は、図表上の%数字の小数点以下を四捨五入したものである。さらに、欠損値を除外したものを100%基準にしている。以下、同じ。

「手をつなぐ行為」を許容する順位としては、「自然に思う」の比率が高い順に並べると、兄弟・姉妹、親友、親、親しい先輩・後輩、普通の友人、普通の先輩・後輩、知り合い程度の人

ており、親密感の有無とスキンシップの許容度の間には何らかの相関があることを示唆している。

図表 8 性別による「手をつなぐ行為」に対する許容度

	男子学生	女子学生	平均
親との場合***	1.54 (1.02)	2.64 (1.43)	2.02 (1.33)
兄弟・姉妹***	1.69 (1.17)	2.75 (1.38)	2.15 (1.37)
親友の場合***	1.40 (0.85)	3.15 (1.45)	2.16 (1.44)
親しい先輩・後輩***	1.36 (0.78)	2.74 (1.35)	1.96 (1.26)
普通の友人***	1.23 (0.64)	2.28 (1.19)	1.69 (1.05)
普通の先輩・後輩***	1.24 (0.62)	1.94 (1.03)	1.55 (0.89)
知り合い程度の人**	1.12 (0.43)	1.34 (0.73)	1.22 (0.59)

注1) 表中の数値は平均値であり、( ) 内の数値は標準偏差である。以下、同じ。

注2) 有意水準の表示は下記のとおりである。以下、同じ。

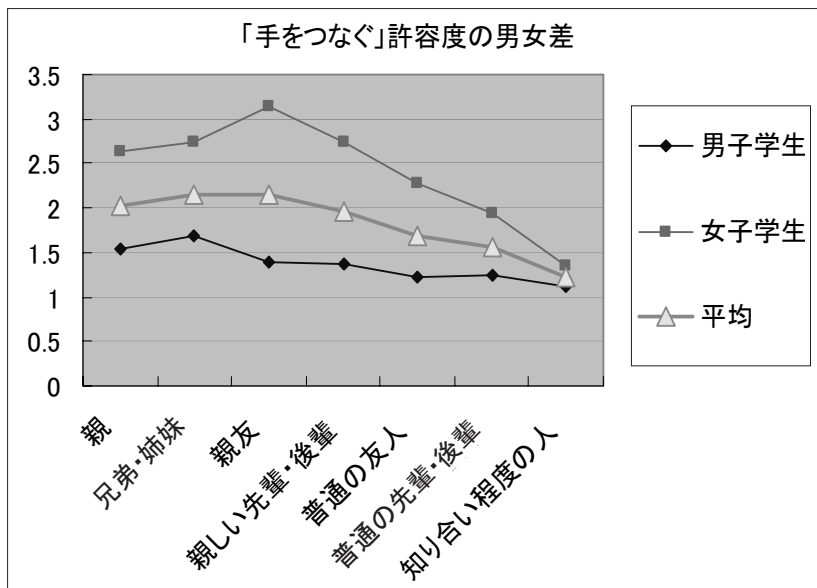
\*\*\* $p \leq 0.001$ 、\*\* $p \leq 0.01$ 、\* $p \leq 0.05$ 、† $p \leq 0.1$

注3) 5点リッカート・スケールは下記の通りである。以下、同じ。

1: まったく不自然 2: やや不自然 3: どちらともいえない 4: やや自然 5: まったく自然

上記の図表8にみるように、「手をつなぐ行為」に対する許容度については、調査した全ての項目において、男子学生より女子学生のほうが許容度がかかなり高く、統計的に性別差があることを示している。特に、図表9のグラフから分かるように、「親友と手をつなぐ行為」に対する許容度において、女子学生の方が男子学生より許容度ははるかに高く示され、許容度には男女差が大きく表れている。

図表 9 性別による「手をつなぐ行為」に対する許容度（グラフ）



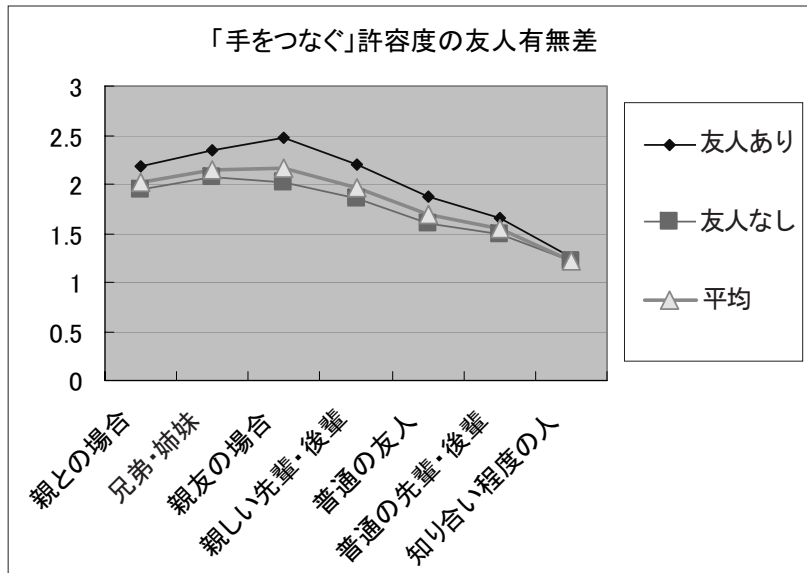


同じく、韓国・北朝鮮・中国朝鮮族の友人がいる人といない人との間では、以下の図表10にみるように、「親友との場合」「普通の友人との場合」「親しい先輩・後輩との場合」「兄弟・姉妹との場合」において、許容度に有意な差が示された。韓国・北朝鮮・中国朝鮮族の友人の有無による許容度の差は、男女差による許容度の差ほど大きくはないが、そのような友人がいる場合に許容度がより高いことが分かる（図表11）。

図表10 韓国・北朝鮮・中国朝鮮族の友人の有無による「手をつなぐ行為」に対する許容度

	友人あり	友人なし	平均
親との場合	2.18 (1.42)	1.94 (1.27)	2.02 (1.33)
兄弟・姉妹 <sup>†</sup>	2.34 (1.35)	2.07 (1.37)	2.15 (1.37)
親友の場合**	2.47 (1.47)	2.01 (1.40)	2.16 (1.44)
親しい先輩・後輩*	2.20 (1.31)	1.85 (1.23)	1.96 (1.26)
普通の友人*	1.88 (1.09)	1.60 (1.02)	1.69 (1.05)
普通の先輩・後輩	1.66 (0.88)	1.49 (0.89)	1.55 (0.89)
知り合い程度の人	1.25 (0.53)	1.21 (0.62)	1.22 (0.59)

図表11 韓国・北朝鮮・中国朝鮮族の友人の有無による「手をつなぐ行為」に対する許容度（グラフ）



### 3.3 同性同士で腕を組む行為に対する許容度

歩きながら話をしたり、近くに座って話をするとき、「腕を組む行為」に対する許容度を調査した結果、以下の図表12のような結果が得られた。

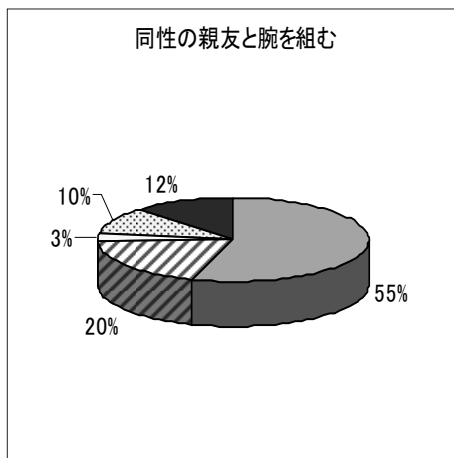
図表12 「同性の人と腕を組む行為」に対する許容度

	まったく不自然	やや不自然	どちらともいえない	やや自然	まったく自然	合計
親との場合	187 (59.0)	64 (20.2)	8 (2.5)	29 (9.1)	29 (9.1)	317 (100)
兄弟・姉妹	182 (57.4)	65 (20.5)	10 (3.2)	37 (11.7)	23 (7.3)	317 (100)
親友の場合	174 (54.9)	62 (19.6)	10 (3.2)	33 (10.4)	38 (12.0)	317 (100)
親しい先輩・後輩	188 (59.3)	68 (21.5)	11 (3.5)	32 (10.1)	18 (5.7)	317 (100)
普通の友人	205 (64.7)	66 (20.8)	13 (4.1)	27 (8.5)	6 (1.9)	317 (100)
普通の先輩・後輩	214 (67.5)	67 (21.1)	17 (5.4)	14 (4.4)	5 (1.6)	317 (100)
知り合い程度の人	270 (85.2)	37 (11.7)	4 (1.3)	3 (0.9)	2 (0.6)	316 (97.7)

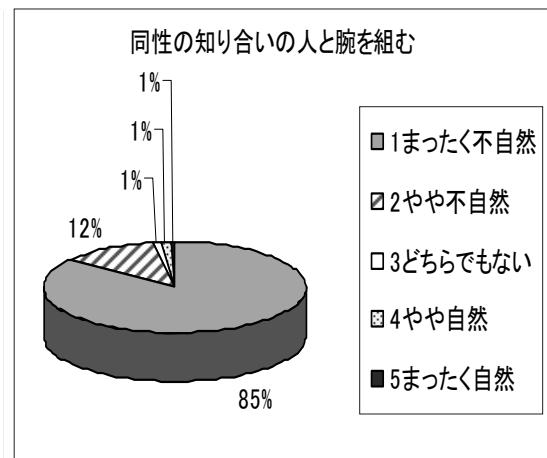
注) 欠損 1 (0.3)

「同性同士で腕を組む行為」に関する調査結果は、全体的には「同性同士で手をつなぐ行為」の調査結果とほぼ同じ結果を示した。「腕を組む行為」が直接肌に触れる「手をつなぐ行為」より許容されやすいであろうという推測のもとで作られた質問項目であったが、「許容度が高い」という調査結果は得られず、結果的に、日本人大学生のコミュニケーションにおけるスキンシップに対する許容度の低さを確認することとなった。「手をつなぐ行為」に対する調査結果と同様、親密感の高いグループである「同性の親友と腕を組む行為」に対する許容度が一番高く示され、「自然に思う」比率が22.4% (71名)、「不自然に思う」比率は74.5% (236名)であった(図表13)。

図表13 同性の親友と腕を組む



図表14 同性の知り合い程度の人と腕を組む



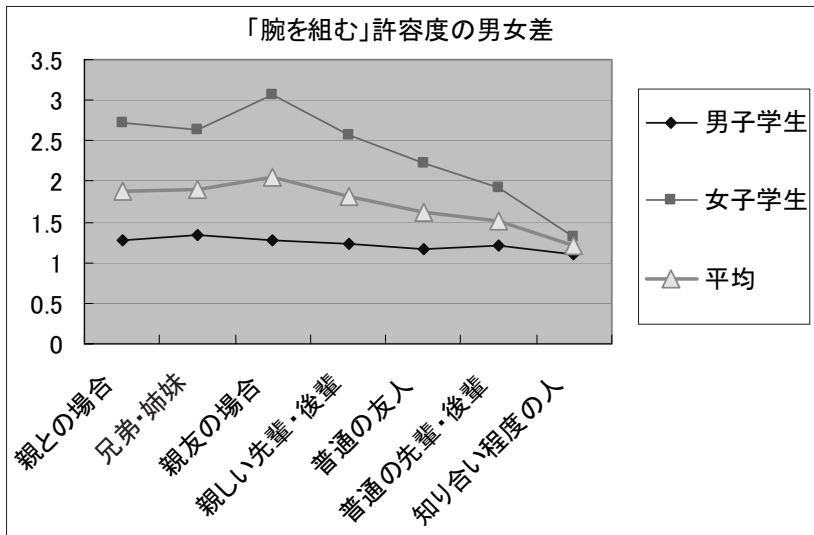
図表15と図表16にみるように、「腕を組む行為」に対する許容度については、調査した全ての項目において、男子学生より女子学生の許容度のほうがかなり高く表れ、統計的に性別差があることを示している。特に、「親友と腕を組む行為」に対する許容度において、男女差がはっきり表れている。「手をつなぐ行為」に対する許容度の男女差を示す図表9と、「腕を組む行為」に対する許容度の男女差を示す図表16を比較すると、全体的な許容度には変化がないものの、「親との場合」「兄弟・姉妹との場合」「親友との場合」において、「腕を組む行為」に対する男子学生の許容度が低く

示されている。さらに、男子学生の場合、「腕を組む行為」について、全ての相手に対して一定の低い許容度を示している。

図表15 性別による「腕を組む行為」に対する許容度

	男子学生	女子学生	平均
親との場合***	1.27 (0.68)	2.72 (1.54)	1.89 (1.34)
兄弟・姉妹***	1.35 (0.83)	2.64 (1.46)	1.91 (1.31)
親友の場合***	1.28 (0.73)	3.07 (1.52)	2.05 (1.44)
親しい先輩・後輩***	1.23 (0.63)	2.58 (1.40)	1.81 (1.23)
普通の友人***	1.17 (0.51)	2.22 (1.22)	1.62 (1.03)
普通の先輩・後輩***	1.20 (0.60)	1.93 (1.05)	1.51 (0.90)
知り合い程度の人**	1.11 (0.44)	1.32 (0.67)	1.20 (0.56)

図表16 性別による「腕を組む行為」に対する許容度（グラフ）



同じく、韓国・北朝鮮・中国朝鮮族の友人がいる人といない人の間では、以下の図表17にみるように、「親との場合」のみに許容度に有意差が示され、他の相手に関してはあまり差がないことが分かる。

図表17 韓国・北朝鮮・中国の朝鮮族の友人の有無による「腕を組む行為」に対する許容度

	友人あり	友人なし	平均
親との場合*	2.14 (1.49)	1.78 (1.25)	1.89 (1.34)
兄弟・姉妹	2.08 (1.41)	1.83 (1.26)	1.91 (1.31)
親友の場合	2.25 (1.47)	1.95 (1.42)	2.05 (1.44)
親しい先輩・後輩	1.98 (1.33)	1.73 (1.18)	1.81 (1.23)
普通の友人	1.74 (1.01)	1.57 (1.03)	1.62 (1.03)
普通の先輩・後輩	1.66 (1.01)	1.45 (0.84)	1.51 (0.90)
知り合い程度の人	1.19 (0.48)	1.20 (0.60)	1.20 (0.56)

### 3.4 同性同士で肩を組む（肩や腰に軽く手を乗せる）行為に対する許容度

歩きながら話をしたり、近くに座って話をするとき、同性と「肩を組むか肩や腰に軽く手を乗せる行為」に対する許容度を調査した結果、以下の図表18のような結果が得られた。

親密感の高いグループと親密感の薄いグループの間の許容度の差は、「同性の人と手をつなぐ行為」や「同性の人と腕を組む行為」の場合と大差がなく、ほぼ同様の結果を示している。しかし、全体的な許容度において、「同性の人と手をつなぐ行為」や「同性の人と腕を組む行為」に比べて許容度が高く示されたことと、許容されやすい順位が変化していることに注目したい。「手をつなぐ行為」や「腕を組む行為」に対する許容度の順位は、「親友」か「兄弟・姉妹」の場合もっとも許容度が高く、次に「親」、「親しい先輩・後輩」の順位であった。しかし、「同性の人と肩を組む行為」に対しては、「親しい先輩・後輩」の場合における許容度がもっとも高く、次いで「親友」「兄弟・姉妹」「親」「普通の友人」「普通の先輩・後輩」「知り合い程度の人」の順となり、許容度の順位に変化がみられた。

図表18 「同性の人と肩を組む行為」に対する許容度

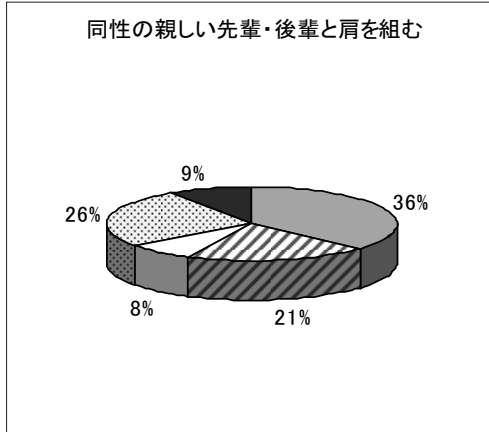
	まったく 不自然	やや 不自然	どちらとも いえない	やや 自然	まったく 自然	合計
親との場合	166 (52.4)	67 (21.1)	10 (3.2)	44 (13.9)	30 (9.5)	317 (100)
兄弟・姉妹	147 (46.4)	63 (19.9)	13 (4.1)	64 (20.2)	30 (9.5)	317 (100)
親友の場合	101 (31.9)	57 (18.0)	30 (9.5)	78 (24.6)	50 (15.8)	316 (99.7)
親しい先輩・後輩	116 (36.6)	65 (20.5)	24 (7.6)	81 (25.6)	30 (9.5)	316 (99.7)
普通の友人	144 (45.4)	75 (23.7)	28 (8.8)	49 (15.5)	19 (6.0)	315 (99.4)
普通の先輩・後輩	156 (49.2)	88 (27.8)	19 (6.0)	42 (13.2)	12 (3.8)	317 (100)
知り合い程度の人	221 (69.7)	66 (20.8)	11 (3.5)	11 (3.5)	8 (2.5)	317 (100)

注) 欠損1 (0.3)、欠損2 (0.6)

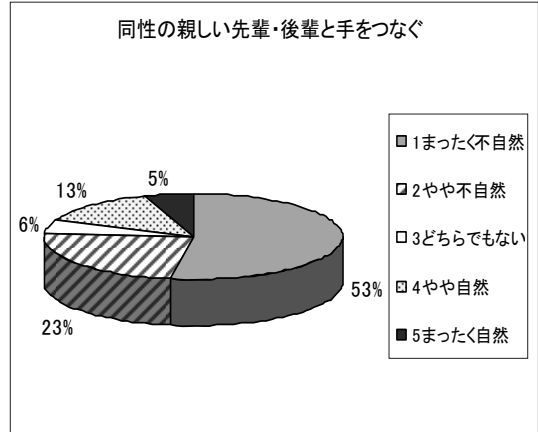
特に図表19のように、「同性の親しい先輩・後輩と肩を組む行為」については、「まったく不自然に思う」人が全体の36.6% (116名) で、「やや不自然に思う」人の20.5% (65名) を含めると、「同性の親しい先輩・後輩と肩を組む行為」に対して「不自然に思う」人は57.1% (181名) になる。図表20の「手をつなぐ行為」に対して「不自然に思う」人の比率と比べると、20%近く減少したことがわかる。「自然に思う」と感じる人についても、「やや自然に思う」人の25.6% (81名) と「まったく自然に思う」人の9.5% (30名) を含め、35.1% (111名) となり、図表20の「手をつなぐ行為」

に対して「自然に思う」人の比率18%に比べると、かなり許容度が高まることが分かる。

図表19 同性の親しい先輩・後輩と肩を組む

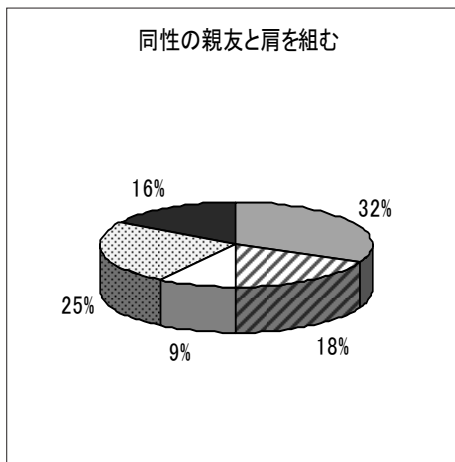


図表20 同性の親しい先輩・後輩と手をつなぐ

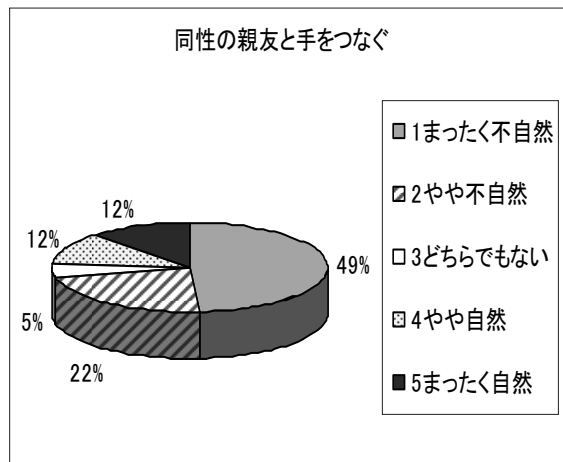


このような許容度の大幅な増加は、各項目で一番高い許容度を示している「親友との場合」においても同じであり（図表21と図表22）、許容度が一番低かった「知り合い程度の人の場合」においても同じである。

図表21 同性の親友と肩を組む



図表22 同性の親友と手をつなぐ



図表23にみるように、「肩を組む行為」に対する許容度において、「親」と「兄弟・姉妹」の場合を除き、男子学生と女子学生の間には有意差は表れなかった。このことは、男子学生におけるスキンシップの許容度のみが高くなったことを意味するものである。男子学生の場合、「同性と手をつなぐ行為」「同性と腕を組む行為」においては許容度が低かったが、「同性と肩を組む行為」に関しては、例えば、サークルの飲み会などで、酔った勢いや雰囲気により肩を組むことがあることから、自然な行為として受け入れられ、許容度が増加したと考えられる。統計的に性別差が認められたの

は「親と肩を組む」場合と「兄弟・姉妹と肩を組む」場合のみである。男子学生の場合、「親友」や「親しい先輩・後輩」に対してもっともスキンシップが許容されやすいことが分かる。

図表23 性別による「肩を組む行為」に対する許容度

	男子学生	女子学生	平均
親との場合***	1.83 (1.25)	2.39 (1.53)	2.07 (1.40)
兄弟・姉妹†	2.09 (1.37)	2.48 (1.52)	2.27 (1.45)
親友の場合	2.72 (1.46)	2.79 (1.58)	2.74 (1.51)
親しい先輩・後輩	2.52 (1.40)	2.48 (1.49)	2.51 (1.44)
普通の友人	2.12 (1.32)	2.11 (1.28)	2.12 (1.30)
普通の先輩・後輩	1.99 (1.24)	1.87 (1.12)	1.95 (1.19)
知り合い程度の人	1.51 (0.99)	1.42 (0.77)	1.48 (0.91)

韓国・北朝鮮・中国朝鮮族の友人がいる人といない人との間では、以下の図表24にみるように、「親との場合」「兄弟・姉妹との場合」「親友との場合」の許容度に有意差が表れた。

図表24 韓国・北朝鮮・中国朝鮮族の友人の有無による「肩を組む行為」に対する許容度

	友人あり	友人なし	平均
親との場合**	2.40 (1.59)	1.91 (1.27)	2.07 (1.40)
兄弟・姉妹**	2.56 (1.55)	2.13 (1.38)	2.27 (1.45)
親友の場合†	2.93 (1.54)	2.66 (1.49)	2.74 (1.51)
親しい先輩・後輩	2.64 (1.49)	2.44 (1.42)	2.51 (1.44)
普通の友人	2.27 (1.35)	2.06 (1.28)	2.12 (1.30)
普通の先輩・後輩	2.07 (1.25)	1.89 (1.16)	1.95 (1.19)
知り合い程度の人	1.50 (0.90)	1.47 (0.92)	1.48 (0.91)

これまでの分析を総合すると、日本人大学生は同性同士のコミュニケーションにおいて、「手をつなぐ行為」「腕を組む行為」「肩を組む行為」といったスキンシップによる非言語コミュニケーションに対しては、「不自然に思う」傾向が強いことが分かる。しかしながら、親密感の薄いグループの「普通の友人との場合」「普通の先輩・後輩との場合」「知り合い程度の人との場合」に対するスキンシップの許容度より、親密感の高いグループの「親との場合」「兄弟・姉妹との場合」「親友との場合」「親しい先輩・後輩との場合」に対するスキンシップの許容度のほうが高く表れ、スキンシップの許容度と親密度合いの間には何らかの相関があることが示唆された。親密感の高いグループの中でも、「親との場合」や「兄弟・姉妹との場合」より「親友との場合」の方が「手をつなぐ行為」「腕を組む行為」「肩を組む行為」などのスキンシップが許容されやすいことが分かる。

親友の場合や親しい先輩・後輩の場合における許容度についても、図表25・26や図表27・28にみるように、「手をつなぐ行為」や「腕を組む行為」よりも「肩を組む行為」に対する許容度の方がかなり高く表れている。

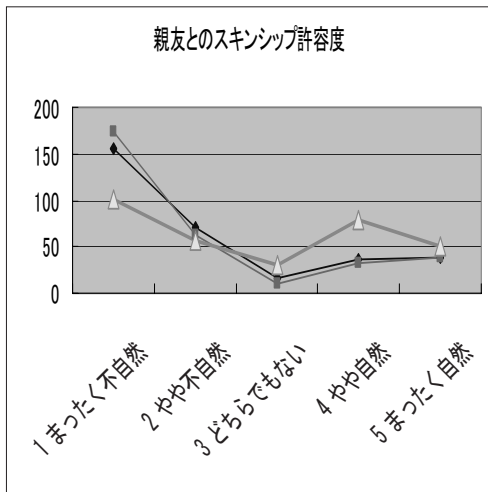
図表25 親友とのスキンシップの許容度

親友の場合	まったく 不自然	やや 不自然	どちらとも いえない	やや 自然	まったく 自然	合計 欠損 1 (0.3)
手をつなぐ	155 (48.9)	70 (22.1)	17 (5.4)	37 (11.7)	38 (12.0)	317 (100)
腕を組む	174 (54.9)	62 (19.6)	10 (3.2)	33 (10.4)	38 (12.0)	317 (100)
肩を組む	101 (31.9)	57 (18.0)	30 (9.5)	78 (24.6)	50 (15.8)	316 (99.7)

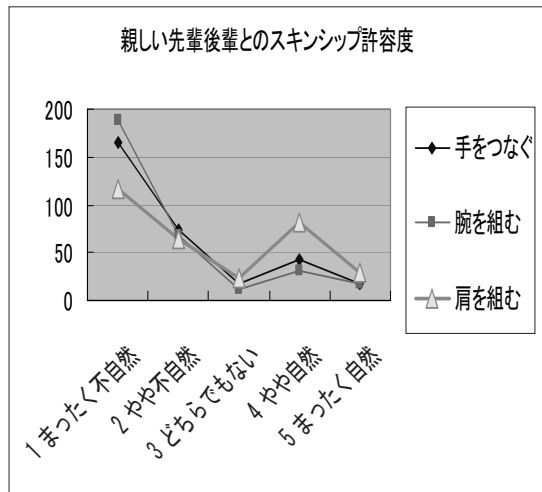
図表26 親しい先輩・後輩とのスキンシップの許容度

親しい 先輩・後輩	まったく 不自然	やや 不自然	どちらとも いえない	やや 自然	まったく 自然	合計 欠損 1 (0.3)
手をつなぐ	166 (52.4)	74 (23.3)	18 (5.7)	42 (13.2)	17 (5.4)	317 (100)
腕を組む	188 (59.3)	68 (21.5)	11 (3.5)	32 (10.1)	18 (5.7)	317 (100)
肩を組む	116 (36.6)	65 (20.5)	24 (7.6)	81 (25.6)	30 (9.5)	316 (99.7)

図表27 親友とのスキンシップ許容度



図表28 親しい先輩・後輩とのスキンシップ許容度



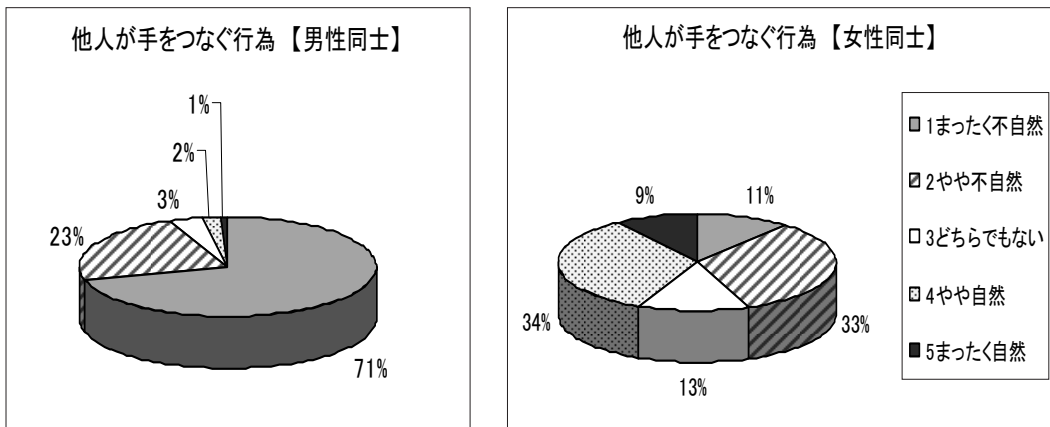
### 3.5 他人の同性同士のスキンシップ行為に対する許容度

今までは、自分が同性の人と「手をつなぐ」「腕を組む」「肩を組む」などのスキンシップをとる場合についての許容度を分析したが、ここでは、他人が同性同士で「手をつないだり、腕を組んだり、肩を組んだり」して歩いたり話をしている場面を受け入れることに対して、どの程度の許容度を示すのかを考察する。質問項目を「男性同士の場合」と「女性同士の場合」とに分けて調査した。その結果、男性同士が「手をつなぐ、腕を組む、肩を組む」などのスキンシップをとる場面を受け入れることと、女性同士がそのようなスキンシップをとる場面を受け入れることに対して異なる許容度が示された。「手をつなぐ」や「腕を組む」ことに関しては、同性同士の女性の行為に対して、許容度が高く示されたのに比べ、同性の男性同士に対しては許容度が非常に低い結果となっている。もっとも、「肩を組む」ことに関しては、男性同士に対しても許容度が高くなり、女性同士に対する許容度と同様の許容度を示している。

分析の詳細をみると、図表29のとおりである。「他人の同性同士が手をつなぐ行為」に対する許容度は、女性同士の他人の行為に対しては「自然に思う」人が42.9%（136名）、「不自然に思う」人が43.8%（139名）で、ほぼ半々に意見が分かれたのに対し、男性同士の他人の行為に対しては「不自然に思う」人が93.3%（296名）を占め、許容されない度合いが圧倒的に高いことが分かる。

図表29 「他人の同性同士が手をつなぐ行為」に対する許容度

他人の行為	まったく不自然	やや不自然	どちらともいえない	やや自然	まったく自然	合計 欠損1 (0.3)
男性同士	223 (70.3)	73 (23.0)	11 (3.5)	6 (1.9)	3 (0.9)	316 (99.7)
女性同士	34 (10.7)	105 (33.1)	41 (12.9)	106 (33.4)	30 (9.5)	316 (99.7)

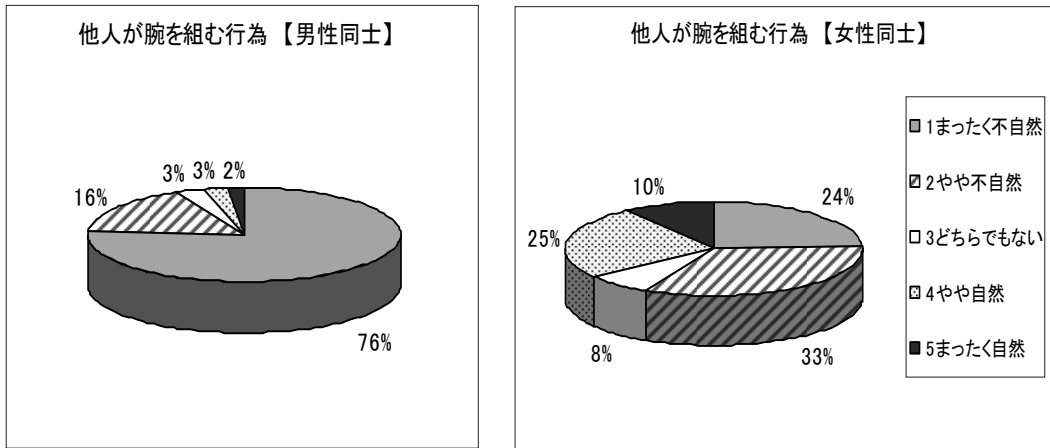


次は、「他人の同性同士が腕を組む行為」についての考察である。図表30にみるように、女性同士の行為については「自然に思う」人が35%（111名）、「不自然に思う」人が57.4%（182名）であり、上記の「手をつなぐ行為」に対する許容度よりも低い許容度が示された。また、男性同士については「不自然に思う」人が92.7%（294名）で、上記の「手をつなぐ行為」に対する許容度と同じく、許容されにくいことが分かった。

図表30 「他人の同性同士が腕を組む行為」に対する許容度

他人の行為	まったく不自然	やや不自然	どちらともいえない	やや自然	まったく自然	合計
男性同士	242 (76.3)	52 (16.4)	10 (3.2)	8 (2.5)	5 (1.6)	317 (100)
女性同士	77 (24.3)	105 (33.1)	24 (7.6)	79 (24.9)	32 (10.1)	317 (100)

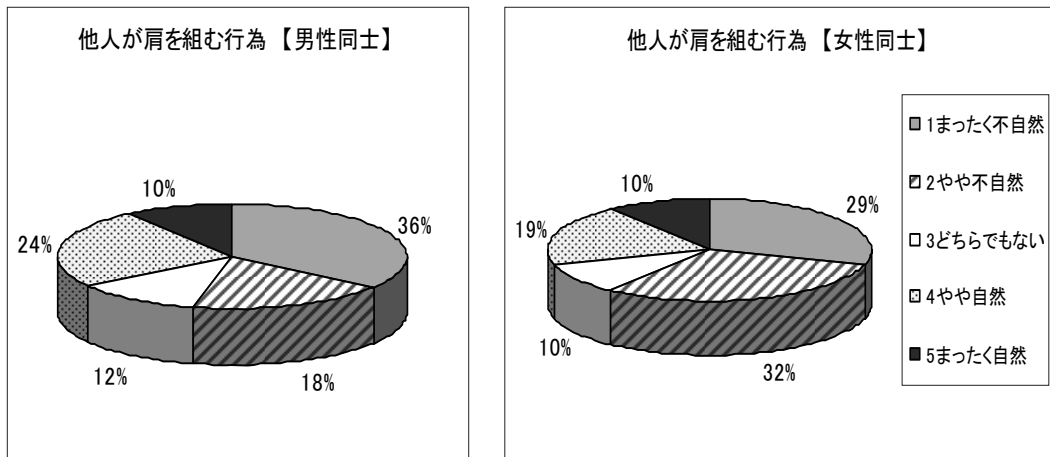




図表31にみるように、「他人の同性同士が肩を組む行為」については、女性同士の行為に対し、「自然に思う」人が29.6%（94名）、「不自然に思う」人が60.2%（191名）であり、「手をつなぐ行為」や「腕を組む行為」に対する許容度とほぼ同様の傾向を示している。しかし、男性同士の行為に対する許容度については、「不自然に思う」人が大幅に減少し53.3%（169名）を占めており、「自然に思う」人は34.4%（109名）に増加し、「手をつなぐ行為」や「腕を組む行為」に対する許容度に比べ30%以上も許容度が高いことが分かる。

図表31 「他人の同性同士が肩を組む行為」に対する許容度

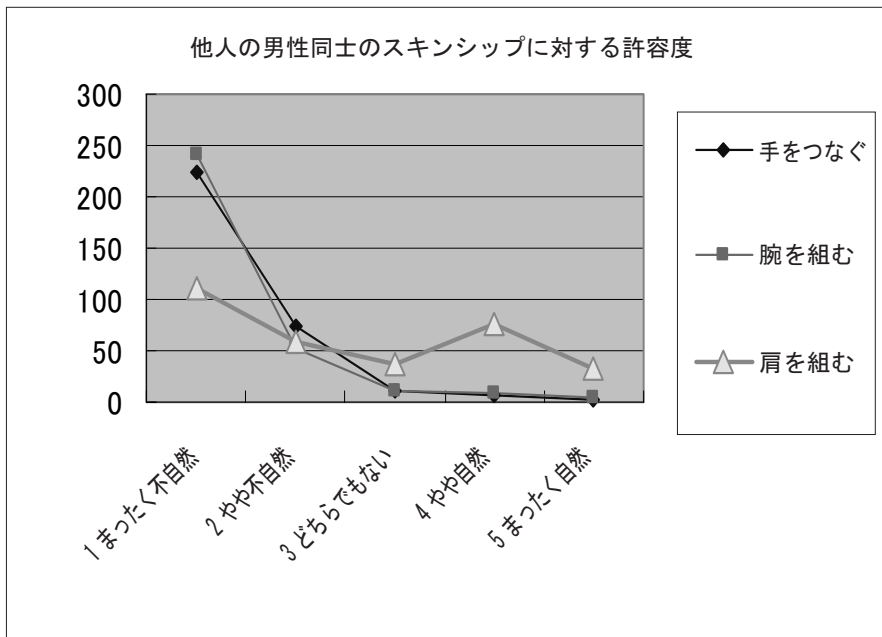
他人の行為	まったく不自然	やや不自然	どちらともいえない	やや自然	まったく自然	合計 欠損 1 (0.3)
男性同士	111 (35.0)	58 (18.3)	38 (12.0)	77 (24.3)	32 (10.1)	316 (99.7)
女性同士	93 (29.3)	98 (30.9)	31 ( 9.8)	61 (19.2)	33 (10.4)	316 (99.7)



図表32は、「他人の男性同士のスキンシップ」に対する許容度についてまとめたものである。「肩を組む行為」に注目すると、他の2つの行為に比べ、「まったく不自然に思う」人の比率が相対的に低く（35%）、「やや自然に思う」あるいは「まったく自然に思う」人の比率が非常に高いことが分かる。

図表32 他人の男性同士のスキンシップに対する許容度

男性同士の行為	まったく不自然	やや不自然	どちらともいえない	やや自然	まったく自然	合計 欠損1 (0.3)
手をつなぐ	223 (70.3)	73 (23.0)	11 (3.5)	6 (1.9)	3 (0.9)	316 (99.7)
腕を組む	242 (76.3)	52 (16.4)	10 (3.2)	8 (2.5)	5 (1.6)	317 (100)
肩を組む	111 (35.0)	58 (18.3)	38 (12.0)	77 (24.3)	32 (10.1)	316 (99.7)



また、性別による違いでは、「他人の男性同士が手をつなぐ行為」に対する許容度について、女子学生の許容度は低く、男子学生と女子学生の許容度に統計的に有意な差があることが分かる（図表33）。つまり、女子学生の方が「他人の男性同士が手をつなぐ行為」についてより不自然に思うことを示している。

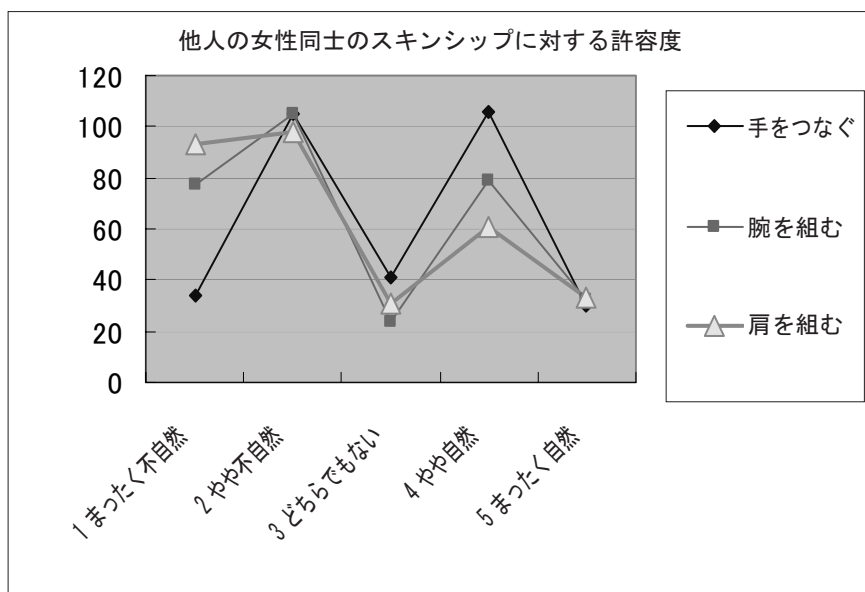
図表33 性別による「他人の男性同士のスキンシップ」に対する許容度

男性同士のスキンシップ	男子学生	女子学生	平均
手をつなぐ*	1.47 (0.83)	1.30 (0.57)	1.40 (0.73)
腕を組む	1.41 (0.83)	1.31 (0.75)	1.37 (0.80)
肩を組む	2.60 (1.36)	2.50 (1.52)	2.56 (1.43)

図表34にみるように、「他人の女性同士のスキンシップ」に対しては、「手をつなぐ行為」がもっとも許容度が高いことが分かる。「他人の男性同士のスキンシップ」において、「肩を組む行為」がもっとも許容されていることと照らし合わせると、前者はスキンシップにおける女性の特徴、後者はスキンシップにおける男性の特徴といえそうである。

図表34 他人の女性同士のスキンシップに対する許容度

女性同士の行為	まったく不自然	やや不自然	どちらともいえない	やや自然	まったく自然	合計 欠損 1 (0.3)
手をつなぐ	34 (10.7)	105 (33.1)	41 (12.9)	106 (33.4)	30 ( 9.5)	316 (99.7)
腕を組む	77 (24.3)	105 (33.1)	24 ( 7.6)	79 (24.9)	32 (10.1)	317 (100)
肩を組む	93 (29.3)	98 (30.9)	31 ( 9.8)	61 (19.2)	33 (10.4)	316 (99.7)



また、「他人の女性同士が腕を組む行為」に対して、男子学生より女子学生の許容度が高く表れ、男子学生と女子学生の許容度に統計的に有意な差があることが分かる（図表35）。

図表35 性別による「他人の女性同士のスキンシップ」に対する許容度

女性同士のスキンシップ	男子学生	女子学生	平均
手をつなぐ	3.03 (1.24)	2.91 (1.20)	2.98 (1.22)
腕を組む*	2.50 (1.30)	2.82 (1.40)	2.63 (1.35)
肩を組む	2.53 (1.34)	2.47 (1.40)	2.50 (1.36)

#### 4 まとめと今後の課題

本稿では、「ゼロ・ディスタンス」論においてキー概念となっているコミュニケーション距離に着目し、その操作化変数としてのスキンシップ許容度に関する調査結果をもとに分析を行った。

分析結果によれば、自分と同性間での「手をつなぐ行為」「腕を組む行為」「肩を組む行為」等について、親密感の薄いグループより親密感の高いグループの場合において、スキンシップ許容度が高く、男子学生より女子学生の方がスキンシップに対する許容度が高く示された。特に、「手をつなぐ行為」や「腕を組む行為」においては、ほとんどの分析対象において女子学生の許容度が高く、許容度における性別差ははっきりと示されたが、「肩を組む行為」においては女子学生と男子学生の間に許容度の差はあまり見られなかった。「他人の男性の同性同士」や「他人の女性の同性同士」の間で想定される「手をつなぐ行為」「腕を組む行為」については、「女性の同性同士のスキンシップ」に対する許容度が高く示された。「肩を組む行為」については、「男性の同性同士」と「女性の同性同士」に対して似通った許容度が示された。また、「女性の同性同士のスキンシップ」においては、「手をつなぐ行為」「腕を組む行為」「肩を組む行為」の順に許容されているが、「男性の同性同士のスキンシップ」においては、「肩を組む行為」がもっとも高い許容項目として示された。また、「他人の同性同士のスキンシップ」に対する許容度においては男女差が表れなかった。全体的に、日本の大学生はコミュニケーションにおいてスキンシップを許容する程度が低く、スキンシップ許容度から測りうる物理的コミュニケーション距離が広いことが推測された。

今後、「スキンシップ許容度にみるコミュニケーション距離」について、韓国・中国などのアジアの同一文化圏内での比較分析やアメリカ・ヨーロッパなどの異文化圏との比較分析を通じ、コミュニケーション距離に関する「ゼロ・ディスタンス論」の仮説を実際のデータにより検証することに行っている。その分析結果を踏まえ、異文化理解のための理論的・実証的根拠を提示したい。

本稿の分析によって得られた結果は、日本人のコミュニケーションにおけるスキンシップの許容度を理解する実証データとしては勿論、他の文化圏の人が日本人との異文化コミュニケーションを図る場面で大いに役立つであろう。また、異文化理解という側面でも貴重な情報を提供することになる。さらに、研究の面においても、これまでの異文化コミュニケーションの理論に対して、「コミュニケーション距離」という新たな視点を提示する契機となるであろう。本研究による実証分析により、異文化コミュニケーションに関する理解が深まり、多くのコミュニケーション・トラブルが解消され、多文化共生時代の異文化理解がさらに促進されることを期待している。

#### 参 考 文 献

- E. T. Hall, *Beyond Culture*, Anchor Books, 1976. (岩田慶治・谷泰訳、『文化を超えて』TBSブリタニカ, 1979.)
- G. Hofstede, “The Cultural Relativity of Organizational Practices and Theories”, *Journal of International Business Studies*, Fall 1983.
- G. Hofstede, “The Interaction between National and Organizational Value Systems[1]”, *Journal of Management Studies*, 22:4, July 1985.
- G. Hofstede, *Cultures and Organizations: Software of the mind*, McGraw-Hill International, 1991. (岩井紀子・岩井八郎訳、『多文化世界：違いを学び共存への道を探る』有斐閣,

1995.)

黒木雅子, 『異文化論への招待』, 朱鷺書房, 1996.

曹美庚, 「日本人と韓国人の異文化コミュニケーション」『人間環境学入門』, 中央経済社, pp.100-109, 2001.

曹美庚, 「消費者行動に見る文化的側面」『京都学園大学経営学部論集』14 (1), pp.41-58, 2004.

曹美庚・李建, 「消費者行動と異文化理解：日本と韓国の比較を中心に」『京都学園大学経営学部論集』16 (1), pp.1-23, 2006.

鍋倉健悦, 『異文化間コミュニケーションへの招待：異文化理解から異文化との交流に向けて』, 北樹出版, 1998.

林吉郎, 『異文化インターフェイス経営』, 日本経済新聞社, 1994.

本名信行・秋山高二・竹下裕子・ベイツ・ホッフア, 『異文化理解とコミュニケーション1：ことばと文化』, 三修社, 1994.

本名信行・秋山高二・竹下裕子・ベイツ・ホッフア, 『異文化理解とコミュニケーション2：人間と組織』, 三修社, 1994.

村上征勝, 『文化を計る：文化計量学序説』, 朝倉書店, 2002.

八代京子・荒木晶子・樋口容視子・山本志都・コミサロフ喜美, 『異文化コミュニケーションワークブック』, 三修社, 2001.